國學院大學学術情報リポジトリ

学生懸賞論文発表 応募状況と選考経緯

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: [國學院大學総合企画部広報課] メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/94

学生懸賞論文発表

第一部門（本学文学部・神道文化学部・別科在籍者）

佳作

山本夏希（文学部日本文学科四年）

『源氏物語』「陽成院の御笛」考

—準拠とそのもたらすもの—

第二部門（本学大学院文学研究科・専攻科在籍者）

入選

石隈聡美（文学研究科史学専攻博士課程前期一年）

鯰絵と板元

佳作

座安浩史（文学研究科文学専攻博士課程後期三年）

格助詞の後ろにつくウチナーヤマトゥグチ

「ガ」の用法—石垣市方言を具体例に—

（所属・学年は、応募当時）

平成二十六年度学生懸賞論文の応募状況と選考経過

國學院雑誌編集委員会

本年度の学生懸賞論文の応募論文数は、文学部・神道文化学部学生・別科在籍者を対象とする第一部門二本、大学院文学研究科・専攻科在籍者を対象とする第二部門四本であった。昨年度一本であった第一部門の応募が二本、昨年度二本であった第二部門の応募が四本あったことは、たいへん喜ばしいことである。

選考過程で議論になったのは、表題と内容の整合性、オリジナリティ、問題提起が明瞭であるか否か、結論と照応しているか、論文中の学術上の述語の定義は適切か否か、論証過程に破綻がないか、当該課題の研究史が十分に踏まえられているか、日本語の表現は適切か、などであった。今後、懸賞論文に応募する際には、上記の点に、ぜひ留意してほしいものである。また、本年度の応募論文数は合計六本と昨年度に比して増加したが、あらためて、学生懸賞論文の意義を周知し、意欲的な研究成果が積極的に応募されることを期待したい。

なお、五月八日に開催された國學院雑誌編集員会において、査読の結果をふまえて厳正に審査した結果、次の一本を入選、二本を佳作とした。

第一部門（本学文学部・神道文化学部・別科在籍者）

佳作

山本　夏希（文学部日本文学科四年）

『源氏物語』「陽成院の御笛」考

―準拠とそのもたらすもの―

第二部門（本学大学院文学研究科・専攻科在籍者）

入選

石隈　聡美（文学研究科史学専攻博士課程前期一年）

鯰絵と板元

佳作

座安　浩史（文学研究科文学専攻博士課程後期三年）

格助詞の後ろにつくウチナーヤマトゥグチ

「ガ」の用法―石垣市方言を具体例に―

（所属・学年は、応募当時）

右の論文はいずれも、問題意識の持ち方、オリジナリティ、実証性と資料提示の手順、論証結果などについての学術的な成果が評価されたものである。入選となった石隈聡美氏の「鯰絵と板元」に関しては、完成度の高さが編集委員会において注目された。佳作となった論文については、学術論文としてやや不備な箇所が見られた。選評を参照され、さらなる学修、研究をすすめていただきたい。

平成二十七年度　**國學院雑誌学生懸賞論文募集**

一、応募資格：第一部門（本学文学部・神道文化学部生・別科在籍者）
　　第二部門（大学院文学研究科・専攻科在籍者）
一、枚　　数：四〇〇字詰三〇枚～四〇枚以内
一、テー　マ：題目は問わない。
　　但し、未発表学術論文に限る（卒業論文も可）
一、締切　日：平成二十八年三月末日（当日消印有効）
一、入　　選：賞状ならびに副賞（5万円）
　　佳　　作：賞状ならびに副賞（3万円）
一、発　　表：入選論文およびすぐれた佳作論文は本誌に掲載予定
一、選　　考：國學院雑誌編集委員会
一、投　稿　先：國學院大學総合企画部広報課

詳しくは本誌表紙裏面を参照

選評

石隈　聡美（文学研究科史学専攻博士課程前期一年＝平成二十六年度）

鯰絵と板元

本論文は、江戸末期安政2年10月2日の江戸地震直後に大量に流布した鯰絵に関するものである。鯰絵は、従来、文芸の観点から断片的に論考が進められてきたが、石隅はこれまで、絵師の名前や板元の印もない「無改め」の二〇〇種以上の図像を数えるこれら鯰絵を、詞書きを含めて詳細に分析してきた。その基礎研究を踏まえた本論文では、鯰絵出版と受容の実態に迫るべくさらに論を進めている。

まず、当時の鯰絵出版取り締まりに関する史料の解析によって、役者見立名所絵の板木が死絵に用いられている事例があること、さらに、役者見立絵から鯰絵へと構図やモティーフの借用ないしは流用が認められることなどを指摘する。その上で、まずは、嘉永5年から6年にかけて出版された三代豊国による役者見立絵、合わせて国芳による役者見立絵の流行を促した板元を特定し、ついで、それらの取り締まりに関する史料分析から関わりをもった板元を絞り込んでゆく。さらに、八代目團十郎の自死を受けて流行した死絵に関わった板元を精査し、その中から鯰絵出版に関わった板元を推定する。このような地道な作業を経て、そこに浮かび上がってくるのは、幕末の出版事情と出版統制の実体である。当時の板元には、学問書を扱う「書物問屋」と草双髪、洒落本、死絵、浮世絵、錦絵、長唄本などを扱っていた「地本問屋」があったが、この内、後者が死絵や鯰絵出版に関わったとみなされ、仮名垣魯文や品川屋久助ら数名を特定するに至っている。

以上のように、文献および画像資料を徹底的に分析し、独自の分類整理によって構成された表にもとづいて結論と今後の展望を提示する本論文は、鯰絵の出現とその消滅のみならず幕末期の出版事情を明るみに出すものである。それは、鯰絵研究の基盤となるばかりでなく、災害とその文化的受容という新たな学問の地平を開くものであるといえよう。美術史的のみならず災害文化史的観点からのアプローチは十分評価できる。